

玄界灘の海士（あま）

～魏志倭人伝も伝える潜水漁。恵みの海だが環境悪化も心配～

「海士（あま）」は潜水漁をする漁夫のことを言い、女性は「海女」と書く。古来は「海人」と書いて、漁を生業とする人々全般を指していた。海士のことを記した文献で最も古いものは有名な『魏志倭人伝』で、しかも弥生時代の唐津地方・末盧国（まつろこく）の風俗の記述に出てくる。「好んで魚鰓（ふく）を捕え、水、深淺無く皆沈没して之を取る」とある。東松浦半島から唐津湾にかけ磯場が豊富で、われわれの祖先が海の恵みで暮らしていたことを示している。

唐津藩時代にも多くの浦や島から捕れるアワビ、サザエ、ナマコなどが藩経済の重要な支えとなっていた。名護屋浜の海士は豊臣秀吉のお墨付きで、半島全域の特権入漁権を主張し、この権益は昭和20年代までも続いた。その由縁は秀吉が朝鮮出兵の際、名護屋の海士たちが軍船の水先案内の大役を果たしたことからで、その範囲は湊土器崎から西は平戸藩境まで及ぶものであった。1773年（安永2）ごろに出された『肥前国物産図考』に漁の様子が描かれていますが、当時はアワビ漁を第一として、見あたらない時はサザエやナマコを捕ると説明している。

体ひとつの仕事だった潜水漁も、明治期に水中眼鏡が導入され、戦後になるとウエットスーツが使われ始め漁の負担が大きく軽減された。海士をめぐる環境も大きく変わり、漁業協同組合が各地に設立されるなかで、名護屋浜以外の漁民も地元での潜水漁を始めた。

波戸岬でのサザエの壺焼き風景は、素晴らしい景観とともに観光客の楽しみの一つとなっている。

玄海沿岸の海士漁をまとめたデータがなく、従事者数、水揚げ高など確実には分からないが、各漁協に所属する組合員が決められた漁場、漁期を守って漁を行っている。消費者の高級志向でアワビ、ウニなど磯ものの需要が高まっている一方で、乱獲の心配のほか高速艇や酸素ボンベを使う悪質な密漁も跡を絶たない。さらに磯焼けと言われる藻場の荒廃も生育環境を悪化しており、課題も少なくない。

分野	産業
地域	鎮西

◎地図・写真・統計資料など



サザエの壺焼き
(唐津市フォトライブラリーより)



波戸岬
(唐津市フォトライブラリーより)



真鍮製水中めがね
林万次郎が開発した
(『唐津探訪』より)

◎引用・参考文献（出典）

- ◆『新版・鎮西町史（下巻）』
- ◆『肥前国物産図考』

◎エピソード・伝承・うんちく など

郷土先覚者列伝（昭和55年10月20日）唐津郷土先覚者顕彰会HPより抜粋
< 林 万次郎 >

漁業家（名護屋） 大正9年没

明治20年代まで玄海の海士は水中眼鏡を知らなかった。万次郎は苦心の末、真鍮製の眼鏡を発明、水中眼鏡の使用が普及し海士漁業振興の基礎をつくった。万次郎はまた太閤のお墨付「玄海沿岸無償入漁」の特典を実行するため農商務省に願い出た。東は湊、西は長崎県境まで名護屋海士は無償入漁の権利を獲得、漁民から「玄海海士の父」として功績を称えた彰徳碑が名護屋に立っている。

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html